

古川龍城と山本一清

流星のように現れて、消えていった謎の天文学者がいる。古川龍城である。東亜天文学会誌『天界』第1巻第6号（1921年）に「金星観測記念」と題した口絵写真が掲載されている。宇宙物理学教室に導入されたばかりのブラッシャー10インチ反射望遠鏡を使つての金星観測の記念写真である。写っている人物の名前も記されていて、前列向かつて右端が山本一清助教授、その右後方に袴姿で腕組みをして立っているのが古川龍城助手である。おかつば頭の面長でなかなか粋な人だったようだ。新城教授率いる宇宙物理学講座はこの年に物理学科から独立し、図書館と物理学科建物の間にあつた御大典記念バラックに居を構え、単独の学科として宇宙物理学科をなつた。一講座だけの小さな学科であつた。



川崎（十吋反射鏡）安田 山部 古川
小出水 塩田 市原 池田 山本

古川は山本一清と同じく文筆がたち、文章にはかなり自信があつたようである。山本の日記には、大正8年4月14日に古川へ手紙を送つたことが記されている。山本も学生時代に出入りしていた京大の上賀茂観測所にいた古川との交流がこのころからあつたことを示している。翌大正9年（1920）9月に山本一清と共同して天文同好会を立ち上げた。ちなみに機関誌の「天界」という名の発案者は古川だという。山本が欧米留学に旅立つた後、大正11年（1922）には京都帝大を辞して、東京麻布の天文台に技手として移つた。そして大正12年9月の関東大震災に遭遇することになる。実際に東京で体験した震災の現実、彼の人生を変えてしまった。その決意表明ともいえる便りが『天界』第4巻第38号（1924

年3月号)に掲載されているので、つぎに全文を引用する。

東京天文台の一年二ヶ月 大正九年の夏、山本助教授と共に本誌を創めたが、初め多数の会員を得るか、どうか少々心許なかったが、それでも案外世間には天文の好きな篤志家が多かったと見へて其の後続々本誌は購読者を殖やし、天文同好会員は先輩の日本天文学会々員より頭数に於いて超過した。先づ目出度ことで大に祝意を表して置く。

越えて大正十一年、吾が輩は多年親んだ、帝都の土地を離れ、東京へ来て天文台に入った。それは東京は出版業に於いて全国に冠たる土地であるから東京で思ふ存分ペン軸の折れ曲るまで書いて見たいと思ったからだ。さふして天文台に勤める傍ら、精一杯書いて居たところ、去年の九月一日の大地震で、自分はその日土曜日だったから、午飯少し前に役所を出て、近くの下宿に帰らうとしつゝある途すがらだったから、幸ひ恐ろしい目をせず街上に悠々家屋の倒壊し、人々の圧死する有様をとくと見届けた。

自分は外でさして大なる危険に遭遇しなかつたとはいへ精神上に甚大なる打撃をうけ何だか今まで眠って居た目が一時にぱっと見開いた様だった。自分の本当の進むべき道は果たして天文学であつたらうかと、よく思案した。

天文学は自分の性質として一寸その文字が複雑すぎる。天の笠をかなぐりすてた文学が吾が輩に最も適する事を初めて発見し年頃親しんだ学問に言ひ知れぬ愛別離苦を感じ、未だ見ぬ新しき境地に入る不安と懊悩の心的過程は近々公にする小説「二皮眼」で読んで貰ひたい。

十一月天文台にお別れして、昼夜の区別なく創作に耽った。尤も俸給をたれた吾が輩の生活状態を心配して下さる知人もあるでせうが、そこはもう十分吾が振ふペン軸が、収入をしてくれるので大丈夫だ。

けれども、何といふ自分は偏屈の馬鹿者の未練な心であらう。すっかりサイエンスと縁切れした気になったものゝ、矢張り明治三十六年以来やり続けた天文と別れるのが、何よりもつらい。又科学者のはしくれを標榜し得なくなったことが、この上もなく、うら淋しいので又々逆戻ったやうな体裁となり、天文学はひまひまにやり、尚自分の世界中で一番崇拜する××博士(注：アインシュタイン)も程近くにおいでになるので研究に事欠くこともなからうと安心して居る。

又一方近頃地震学がはやり出したので時好に投ずるといふわけもないが、微力何のたしにもならないだらうが、今村博士におねだりして東大地震学教室に客分となり、濃尾関東両大地震を親しく体験して、地震と因縁浅からざるこの身は残る半生を創作の傍ら地震研究に捧げたいと思ふ。

こゝまで書いて読み返して見ると、どうも言ひたいことを十分に言ひ得ない恨みがなきにしもあらず、忌憚なき表白は、どうか創作「二皮眼」を見て下さい。尚本会員の旧知諸子で御来信下さる方は東京麻布北新門前町五畑野方古川宛にして下さい。左様なら(古川)

震災を契機に古川は東京天文台を辞して、文筆業に専念することにした。1923年から

1925年ころまでに下記の著作リストにあるように天文書を多数出版している。山本一清の影響もあるかなり文学の香り高い題名の書物である。というかアインシュタインの来日をひかえて日本中が天文ブームに沸きかえっていた時代を反映している。そして上記の便りにあった小説「二皮眼」を執筆したらしいのだが、手を尽くして探してみたが、実際に出版されたのかどうか今までのところ一切情報がでてこない。現物が無いので内容もわからない。とにかく彼としては震災にたいする心情を精一杯書ききったこの小説にかなりの自信を持っていたようだ。ところが、1926年ころから突然「鳥」に関係する著作が現れる。山本天文台資料にある『子供の科学』1926年12月号に「十二月の鳥」という色刷りの美しい挿絵入りの記事を執筆している。身分は国民新聞記者ということになっている。国民新聞は徳富蘇峰が明治23年に創刊し、現在の東京新聞の前身である。前後の号を調べてみないとわからないが、おそらく連載記事ではないか。その筆づかいはなかなか軽快で、自らの観察体験にもとづいた文章のようである。籠の野鳥の写真も掲載されていることから、飼っていたものと思われる。同年、日本鳥学会誌『鳥』に寄稿するなどかなり専門性をもった文章も書いたようである。山階鳥類研究所にも出入りしていたようだ。それ以降彼の天文書が出版されることはなかった。鳥の研究者からは天文学出身の謎の人物とされており、かたや天文学分野からみても謎の多い人物である。

古川は、山本一清の遺稿「ゆかりの友」(『星と人』第16号、斐太彦天文処)によれば、一時「国民新聞」の科学記者などをつとめ、晩年は岐阜県の郷里に帰り、昭和30年ころに亡くなっただけらしい。古川が東京に移ってからは、山本とは年賀状などのやりとりのほかは親交はなく、亡くなったという情報も岐阜の坂井義雄からもたらされたとあった。山本の残した写真アルバムをくってみたが、古川の肖像写真は前掲の口絵写真一枚しかみあたらなかった。天文学者が大震災を経てジャーナリストに転身したということはどうもなげけるのだが、その先になぜ鳥なのか。筆者にはその心の動きが気になるのでこの一文を書き始めたのだが、古川龍城の心の内を垣間見ることは今のところついにできないでいる。あとは彼の小説の出現を待つのみという心境である。

<古川龍城の著作リスト>

単行本

- 『天文界之智囊』、中興館書店、276頁、大正12年3月(1923)
- 『天体の美観 星夜の巡礼』、表現社、大正12年(1923)
- 『月夜に憧れて』、警醒社、大正12年(1923)
- 『星のローマンス』、新光社、大正13年再販(1924)
- 『手に取るやうな星の世界』、少年少女常識叢書、大正13年(1924)
- 『科学世界 宇宙之構造』、中文館、274頁、大正13年3月(1924)
- 『火星』、ピッカリング著、古川龍城訳、白楊社、166頁、大正13年5月(1924)
- 『自然界の驚異』、一誠社、大正15年(1926)

- 『珍鳥巣引きの秘訣』、資文堂書店、大正 15 年（1926）
- 『インコ類の育て方』、資文堂書店、172 頁、昭和 2 年（1927）

論文

- 「島宇宙説の現状（一）～（三）」、日本天文学会誌『天文月報』、第 16 卷、1923
- 「十二月の鳥」、『子供の科学』、子供の科学社、第 4 卷、12 月号、1926
- 「天文と鳥と」、日本鳥学会誌『鳥』、第 5 卷、第 21 号、27－33、1926

Web ページ

- キガシラシシド「きわめてまれな迷鳥として本州（東京都葛飾区本田木根川町 10 XII1936 古川龍城氏採集）で 1♀がとられた」と山階鳥類研究所の HP にある
http://seichoudoku.at.webng.info/201106/article_5.html

（2012 年 7 月、富田記）